

1994年春に5年ぶりの中国、それも最大の都市上海へ訪れることができた。そもそも虫友の壺坂氏の友人が、上海で合弁企業の取締役としてビジネスにいておられ、あつかましくお邪魔することとなった。前回も、やはり壺坂氏と広州、桂林を訪問したが、その時はまだ人民服を着た人が多く見受けた。そして通貨はF E C（兌換券）の時代であった。しかし、今回訪問した上海は予想していたような中国ではまったくなかった。通貨は人民元一本となり、街ゆく女性は革のミニスカートなど多く、そのうえ、観光地ではアベックが今にも人前で抱き合うようなしぐさをしている。経済改革解放政策

とやらでポップスも自由化され、甘い恋の歌やアイドルソングまで流れている。広い通りには公安警察がやたら多く、また二連結のバスや車、自転車、人の洪水である。それでも静かならまだしも、けたたましく警笛をならすため頭が痛くなる。1994年4月22日このたびで最後になろう、大阪国際空港からの旅立ちで、上海を訪れることができた。



大都市上海市のビル街

4月22日 JTBワールド西日本主催によるMY CHINA上海4ビジネスクラス席にて到着。出迎えのJTB職員が来ず、約1時間まっていたが連絡がとれない。しかし現地でビジネスをしておられ、今回お世話になる森元氏が出迎えに来て下さっていたので、不安はなかった。早速、タクシーにて宿泊地となる27階建てのデラックスホテル、ウエスティン太平洋大飯店へ。荷物を降ろし、またタクシーに乗り、今度は最高級ホテルの花園大飯店（ガーデンホテル）へ。そこは森元氏の会社のそばであり、歩いて会社を訪問することとなった。上海通が行くショッピングゾーン淮海路沿いに会社はある。会社を訪問し、日本人スタッフ及び現地人スタッフにも歓迎を受けた。森元氏は少し用事があるとの事で会社に残り、壺坂氏と2人で淮海路を散策することとなった。淮海路の通りは人と自転車、車のラッシュであり歩道にはブラタナスの並木路が続いている。上海のシャンゼリゼともいわれる洗練されたショッピングストリート。その昔フランス租界であった風情が今も漂うようである。赤煉瓦づくりのブティックやデパート、靴、

帽子、カバン、蓑など多くの店舗がならんでいる。日本資本の伊勢丹のデパートもあったが、筆者の感覚ではまったく面白くなかった。益民百貨商店で早速、中国の昆虫をアクリル樹脂で封入したのを買ひ、ライフワークの昆虫民俗資料のコレクションの数点を増やすことができた。約1時間後、会社へ戻り森元氏と会い、再び明日の山行きの行程をお任せする段取りを計らうためホテルに戻る事となった。

森元氏の会社の専門スタッフが、明日、ほかの大事な仕事があるとのことで、別の女性の通訳を手配していただくこととなった。そして今日は宿泊地のホテルで中華料理をいただいた。しかし、量が多く、ほとんど残す結果となってしまった。夜は、カラOKつまりカラオケへ連れいってもらった。カラオケは筆者はしなかったが森元氏によりチップの渡し方を学んだ。



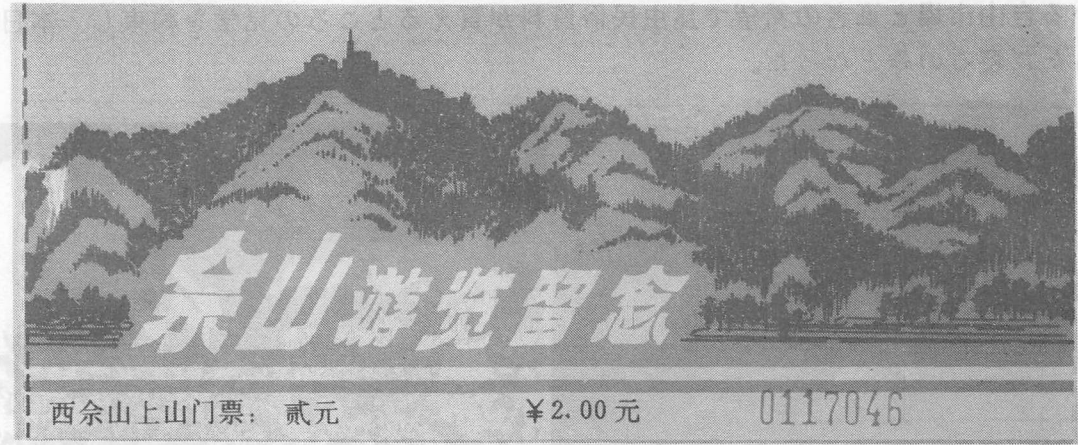
淮海路を走る高級バス



通訳の方さんと筆者

4月23日 昨日と今朝の情報により、上海にはほとんど山はないとのこと。ただ、余山というのがあることが分かった。車をチャーターしてもらい、通訳として方(FANG)さんをつけてもらいホテルを出発した。肌寒い今日はほとんど虫など飛んでいない。途中で1カ所、環境の良い所で車を止めてもらい観察したが全然駄目だった。目的地余山までは2時間くらいと聞いていたが、案外早く着いた。余山の入口にてエノキのなかまを発見、チョウの幼虫がいないかしばらくその付近を観察することにした。そこは茶畑になっており、暫くすると黒いチョウが飛んできた。そのチョウは紛れもなくジャコウアゲハそのものである。数個体は観察しただろうか。その付近を探し、食草ウマノスズクサを探してみたが、形こそ似ているが、食草は見あたらなかった。飛び方は日本産ジャコウアゲハと全く同じであった。その他、アゲハやモンシロチョウ、キタテハ、シジミチョウのなかまも観察した。日本にいるハラビロカマキリも分布しているらしく卵塊が

みつかった。余山は遊覧区らしく、山の上に天文台がある。また車で入るのには  
通行券、人が入るのに



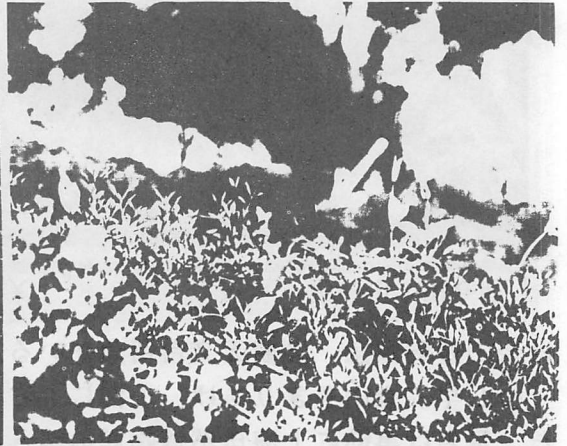
は余山遊覧留念、参観天文台留念がいる。

少し早く余山をきりあげ、上海にもどり、上海自然博物館を訪問することとな  
った。筆者は事前に上海自然博物館の凄さは聞いてはいたが、実際百聞は一見にし  
かずであった。約22種もある化石恐竜やマンモスのお化け化石など、日本では見  
る機会のないものばかりであった。もう一つ凄いものは、人のミイラである。10  
体くらいはあっただろうか。化石化したようなミイラから腹を切開し、縫い合わ  
せた液侵ミイラまで、中国4,000年流石である。2Fにあがると筆者の目的であ  
る昆虫のコーナーや無脊椎動物、魚類、貝類が展示してあった。筆者からの目で  
見ると、昆虫のコーナーはいまひとつ充実ぶりが足らなく思った。3Fは爬虫類  
鳥類、動物類のコーナーであった。絶滅寸前の麝香鹿やパンダの剥製が目をひい  
た。お土産に魚の化石を少々買った。あいも変わらず無愛想な中国ではあるが、  
ここの売店は買うと説明までしてくれる。



夕方になって花園大飯店へ到着。暫くまって通訳の方さん壺坂氏、森元氏、筆  
者それと森元氏のビジネスなかま3人と計7名で近くの中華料理店へ北京ダッグ

付きの夕べをいただいた。その後、30階くらいあるシースルーエレベーター付きの展望台でティータイムとなった。明日の予定を森元氏と相談。早朝からやっている自由市場と筆者の希望で昆虫民俗資料が買えるところの見学を約束し、本日もただ寝るのみとなった。



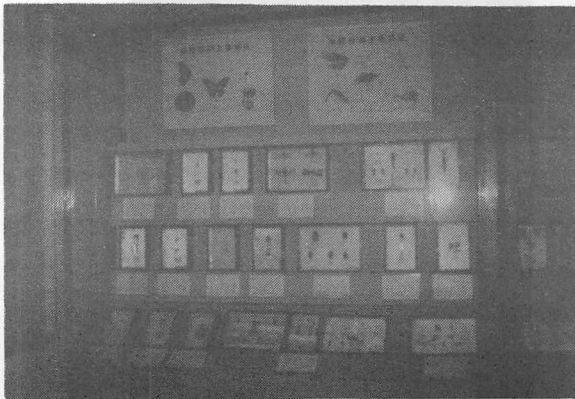
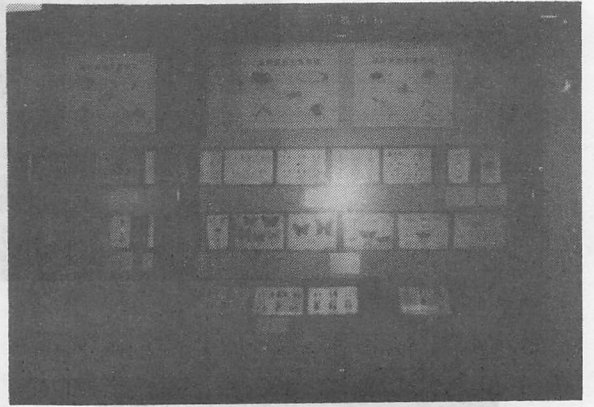
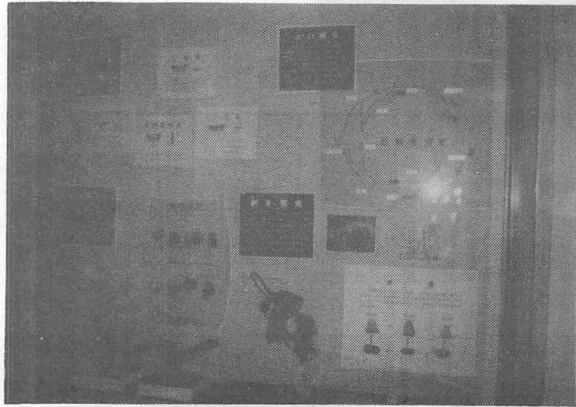
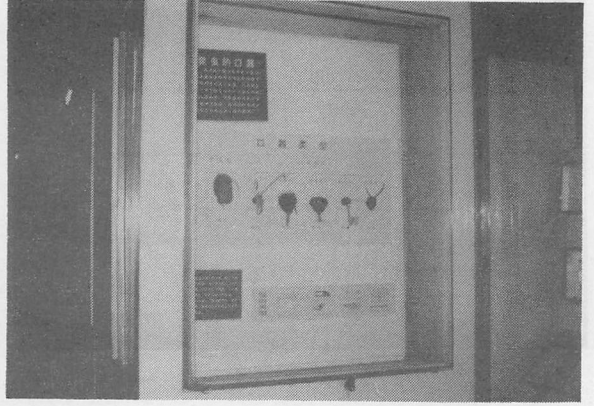
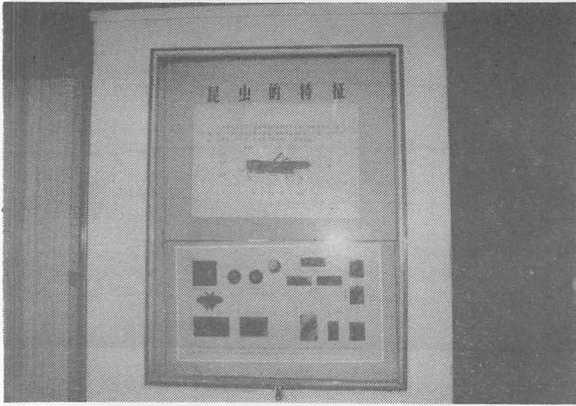
余山の茶畑で観察中の筆者

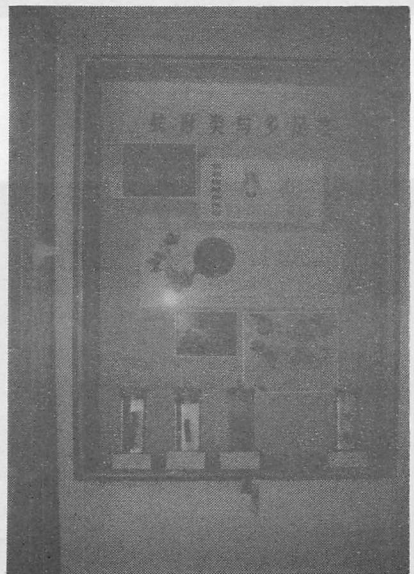
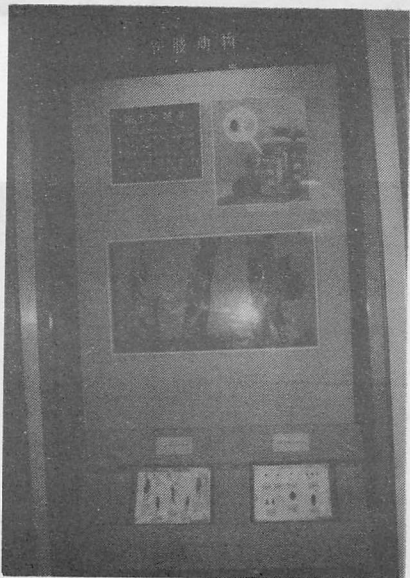
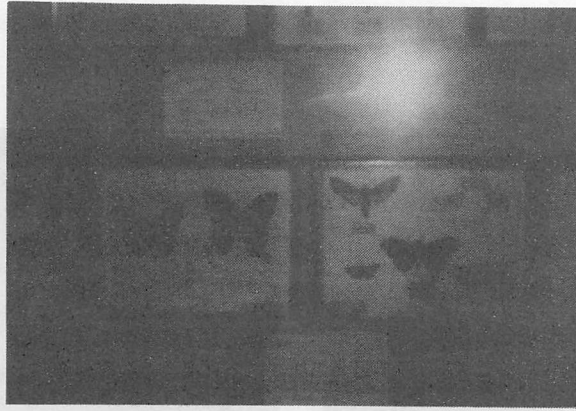
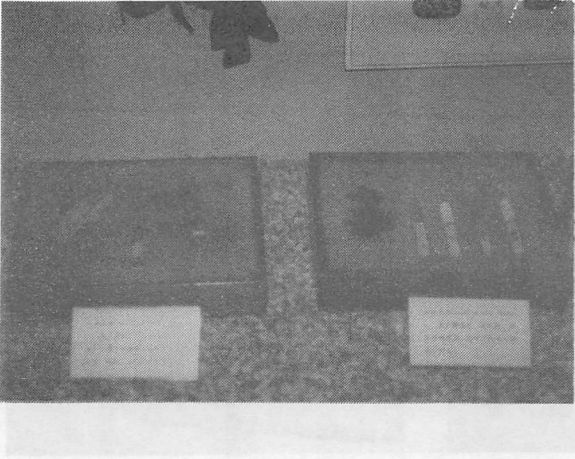
お茶の葉の上を飛ぶジャコウアゲハ

4月24日 昨日の約束通り、朝から野菜や食用品が売っている自由市場の見学をさせてもらった。言葉では言い表しようのない場所である。ブタの解体したもののお豆腐に汚い汁のついたようなもの、タウナギ、その場で首をしめられる鶏などただびっくりするだけである。筆者も昨年、訪問した韓国の南大門や、よく訪問する台湾でもしばしば似たような光景は見てはいるのだが、ここの迫力は凄い。

扱て、筆者の目的地の市場は自由市場から40分くらいだっただろうか。事前に中国の本を読みまくり、筆者の希望する民俗資料が売っているなら、ここしかないと思っていた場所である。その市場に入っても、最初は熱帯魚など、魚の品が多く、また生活用品なども多く焦ってきたが、しばらくすると、へんな壺が視野に入ってきた。まさにそれはコオロギ飼育用の壺であった。森元氏にあわてて通訳をしてもらい、人目もはばかるような低価格で手に入れた。重たいことは分かりながら、4個もコオロギ壺の大きな品物を買ってしまった。それから目についたのは、コオロギ飼育文献である。本は重いので、帰りに買うことを約束して、本の表紙を飾っているひょうたんで出来た飼育用品などが是非ほしいことを告げたところ、もう少しいくと売っているとの事である。そのまま歩くと、老夫婦のような商売人がおり、壺に較べると、かなり高い飼育用品を買った。筆者の私設資料館に展示できる貴重なものがまた増えた。そもそも中国では宋の時代から立秋になると秋興という名のコオロギを戦わせる道楽の賭博があり、コオロギの採集、飼育、闘争などに関するあらゆる技術や道具が高度に発達している。しかし、

上海自然博物館・昆虫コーナー

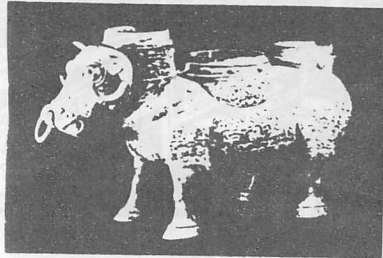




中国では公認されたものではなく、これからもおそらく公にはならないものと思われる。それ故、筆者の求めた諸道具類は貴重そのものである。また近日中に上海に出掛け、買い残した諸道具を求めに行きたいと願っている。

昼前になって、少々時間も早いので昨日訪問した上海自然博物館へ、再度訪れることとなった。上海でビジネスにおられる森元氏も初めての訪問とか。近くにある新装開店した中華料理店にて昼食をし、今度は上海博物館で見学をした。そこは工事中で1Fしかみられなかったが、おりしも大阪市立美術館の館蔵品展であった。日本で一度もみたこともないものが、中国で見れるとは……。

壺坂氏が腹の具合が悪いとのことで夕方近くになって宿泊ホテルに帰ることになり、花園大飯店近くでお土産のカシミヤセーターを買い求めた。日本で買うのと数段に安い。その場で重い荷物を壺坂氏に託し、筆者は森元氏に上海の有名な観光地である豫園へ連れて行ってもらうことになった。豫園は明代に造営された江南式庭園である。2万㎡の敷地をさらに広く見せるため、高い壁や曲がりくねった回廊など、数々の遠近法を工夫した造作は見る場所によって趣きが違い多彩さが楽しめた。豫園には草編み細工があると事前に調べていたので、森元氏に無理をいい場所を探してもらったが結局、廃業したらしく民芸品は入手出来なかった。豫園市場も見せてもらい、そこには食用にヘビやカエルも売っていた。椎茸の安さには呆れてしまい、日本に買って帰りたいぐらいであった。



## 上海博物館

Shanghai Museum

全國重點文物保護單位

## 豫園

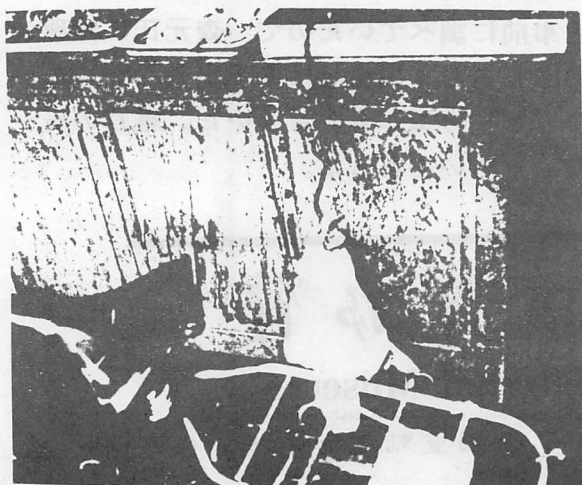
筆者の渡上海の目的には、中国の蚊取り線香の収集も一つであった。ところが上海もあまりに鄧小平の経済改革解放政策が進み過ぎたのか、蚊取り線香なんかみつからない。聞くと、中国の地方（田舎）の小さな薬屋さんにもいけば売っているかもしれない、との店員さんの不親切な返事である。大都市上海は、リキッドタイプの30日、いや60日の日本で売っているあのタイプに変化していたのである。森元氏のはからいで南京路最大の薬局で蚊取り線香は入手したが、素朴な



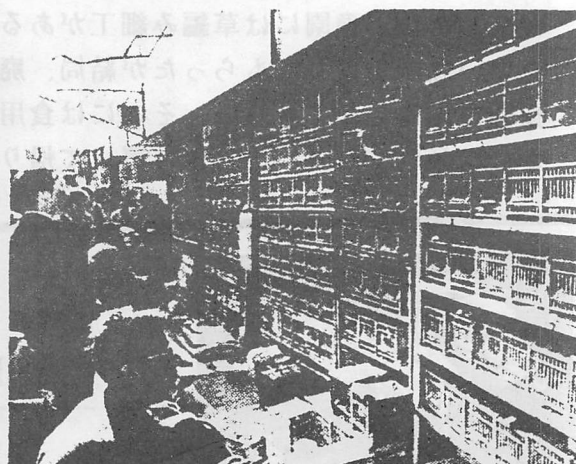
自由市場の入口



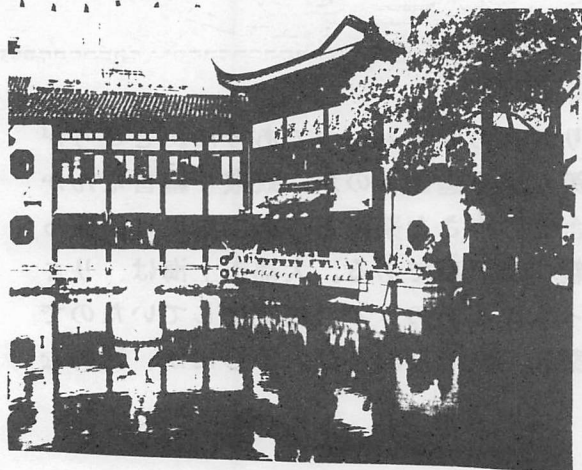
花鳥市場の入口



自由市場のブタの頭



花鳥市場にて



豫園



麝香鹿の剥製



戦前、戦後にあったようなレトロ気分になれる線香は、もはや上海では入手は無理なのかも知れない。

上海最後の夜となる今夜は、宿泊ホテル内で日本食料亭の稲菊 (INAGIKU) で晩ご飯となった。油料理から離れた野菜うどんが、どんなに旨かったか言いあらわしようがない。

4月25日 いよいよ上海とお別れの日である。壺坂氏は人に会うとのことで別行動。筆者はホテル近くの友誼商城へ行きお土産物を物色した。掛軸など円高を反映してか大変安く感じる。しかし、持って帰ることを考えると嵩の高いものは困る。ここでは、七宝焼の蟬やテントウムシを購入した。こんなに安くていいのというくらい安かった。しかし重いのでたくさんは買えない。いつしか時間がたちホテルでの集合時間となった。全員といっても3人だが、あつまり虹橋空港へ到着、機上の人となった。

今ひとつの目的、虫の形をした鼠が今回友誼商店の改築で購入できなかったのは残念であったが、再度上海へ訪問すればいろいろな資料が手に入るだろう。

上海は長江河口の広大な洲の中央に位置し、付近には山らしき山は余山を除き、全くないという地理的要因が、今回のジャコウアゲハやモンシロチョウくらいの蝶相の貧弱さとなっている。今回の上海訪問には虫友の壺坂氏に多大なご協力をいただいた。また上海でビジネス中の森元氏には我々2人に貴重な時間をさいて戴き、ご便宜をいただきました。いいあらわしようのない感謝の気持ちでいっぱいであると共に、森元氏の協力がなかったら上海旅行はもちろん、上海紀行が書けなかったことを記して本稿を終わることとしたい。